

〔編集後記〕

本号をもって三年間の編集委員長の任期が終ることとなった。就任の前には、とてもこのような大役は覚束ないと逃げ廻ったことであったが、何よりも先輩、同僚の編集委員の励ましと協力、経験深い編集事務室の稲垣さんに助けられて、ともかくもキチンと発行が続けられてきたことを感謝している次第である。

さて、現在本誌の一番の課題は、本学における学問研究活動を如何によく紙面に反映させ、かつこれを盛りたててゆくかにある。多くの school journal の例に洩れず本誌の発行の初期にあたっては、このことは何等問題ではなかった。すなわち、学内の研究活動の成果はまず本誌に投稿されたようである。馬杉腎炎の最初の報告なども本誌の歴史を飾るものと言えよう。しかし、続々として発行される専門誌、とくに国際専門誌は多くの研究者から本誌に対する関心を奪う結果となった。無論、これは学問の分化、発展という性質から避け得ない宿命ではある。又、本学の研究業績目録からも窺われるように、すべての研究成果を本誌を載せることは物理的に不可能でもある。

しかしながら、学問のもう一つの重要な側面は、統合と体系化にあることは論を俟たない。生物とくにヒトという複雑な有機体を対称としているわれわれにとって、このアプローチのために、編集委員会では総説、展望、講座などの企画、依頼に多くの努力が注がれてきた。学内のさまざまな領域で、多くの著明なあるいは新進気鋭の研究者から、原稿料もなしに貴重な原稿を戴いたことに厚くお礼申し上げたい。とくに新任の教授の方々には、就任早々の多忙にもかかわらず、ほとんどの方に執筆戴いたことは、本学の今後の研究発展の動向を示す上にも意義のあることと考えている。

正直の所、本誌の編集の責任者となることにもっとも躊躇を覚えた理由は、多様な専門家を抱えた集団の学問活動をどうして把握し、雑誌の内容に反映させてゆくか全く自信がなかったためであった。今でもその自信の無いことは変らないけれど、実は其処に本誌の存在する理由があるのではなからうかと近頃思っている。つまりこの三年間を通じて生体というものの実体は、多面的なアプローチを通じて、理解に努めることが大切なことを編集実務を通じてしみじみと痛感させられたのであった。

「葦の髄から天井覗く」という諺があるけれども、極端に言えば専門誌、専門家はこのような傾向から逃れることはできない。それは、確実ではあるけれども、一面においては安易な道であるとも言えるのではあるこいか。己れの領域以外の世界が存在すること、その重みというのは簡単には計れない大きく深いものであることを体得できたことは何よりも有意義であった。このことを本誌を通じて、とくに生きた人間をとり扱わなければならない臨床家に納得して戴ければと願う次第である。

さて、編集を引き受けるに当って、なるべく全学的な関心を寄せて戴けるようにとの意図から、「研究室紹介」と「ふぉーらむ」の欄を新設した。前者はよく協力を戴いて現在までに11の教室記事を載せることができた。しかし、後者は全くの失敗企画で、ただ一回の掲載を数えたのみであった。その原因をいろいろ考えているが、第1には本誌は固い学術雑誌のイメージが強くて気楽な意見の交流という雰囲気がまだ醸成されていないということ、第2にたとえば毎号の編集後記を書くことが如何に苦痛でありつづけたかという私の体験から、よほどのモチベーションが湧かなければこの種の原稿は書いて戴けないのであろうと推測している。

その編集後記のことであるが、誠に一人よがりの勝手な言い分を毎号載せて戴いた。もとよりこれは、本来のあるべき編集後記の姿でないことはよく承知している。しかし、いわば専門馬鹿である私にとって、掲載された論文についてコメントすることは、ほとんど不可能であり、あえてその矩を越えたとすれば、かえって本誌の学術価値を損うことを恐れた次第であった。私にとっては、学問、教育、研究にかかわる意見を自由に述べる機会を与えられ、そのことを寛容に許して戴いた関係者の方々に感謝に耐えない次第である。

さて、次号からは、奥田教授が編集を担当して戴けることになった。従来、基礎の編集委員長が続いたのが臨床に変わったこと、同教授が国際的にもっとも幅広い活躍をされていること、などから新しい視野に立った魅力ある編集が期待される。本誌の一層の発展を確信しつつ退任の辞とする次第である。

(編集委員長 本田良行)